

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	教育学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	北澤 毅 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	「生徒」であるための方略—中学校における教師—生徒関係に着目して		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・教育学専攻 博士課程後期課程3年	越川 葉子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・教育学専攻 博士課程後期課程3年	越川 葉子	
研究期間	2007	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究のねらいは、学校現場に調査者自らが参与し、教師や生徒の日常的な学校生活の相互行為場面に目を向け、教師や生徒の実践的意義を問うものである。特に生徒個人に備わるとみなされる「個性」や「性格」が、授業場面において教師—生徒間や生徒同士の相互行為を通して観察可能になることを示す。そして、生徒の能力や性格が相互行為を通して観察可能であるということが、教師にとって生徒一人一人を把握し、管理する対象となることを合わせて考察する。また、本研究の手法は、学校現場に調査者が長期的に参与し、教師や生徒とのやりとりを通して知見を得るエスノグラフィーに基づくものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[教師—生徒関係] [エスノグラフィー] [フィールドワーク]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、中学校の授業場面や全体指導場面における教師と生徒、生徒と生徒の相互行為に着目した。はじめに、授業内で教師が「教師」であり続けることの困難を 2006 年度より蓄積した観察記録を元に分析する。次に、教師が授業場面で直面する困難は、一方では、生徒が「個性」を表出する実践的な場として観察可能であることを述べる。本研究成果は、中学校でのフィールドワークの中間報告として位置づける。

1. 観察記録による考察

2006 年 9 月から 2007 年 3 月にかけて参与した授業の観察記録を用いた。本記録は、授業内で調査者が気になった点や印象に残った教師と生徒のやりとりのメモをもとに、訪問時毎にまとめたものである。観察対象は、調査者がティーチングアシスタント (以下、TA) として参加した授業であり、調査場面において、調査者は授業を構成する「教師」の 1 人でもあった。そのため、観察記録の記述内容は「教師」として参与する上での着眼点を反映したものである。そこで、そのような観察記録の特徴を生かし、まずは授業場面において「教師」であるとは、どのように達成され得るのかを TA、授業者の視点から検討した。

(1) TA の視点から—「教師」であることの困難—

調査者は TA として教室内に留まるため、授業に興味・関心を示さない生徒に対し、個別に注意をするという参与の仕方をとった。しかし、担当教師による授業の流れを逸さない範囲で、生徒への注意や個別指導を行わなければならない、生徒と授業内に関わりを持つタイミングを確保することの難しさに直面した。一方、生徒は調査者を「教師」の 1 人として認識しており、生徒への注意を怠る、質問に答えられないということは「教師」として不適切な行為とみなされた。このような生徒の認識は、授業内の調査者に向けられたクレームによって明らかとなった。このことから、教室内で授業を行わない者が、ただ教室に留まっても必然的に「教師」に成り得ることはなく、特に TA の場合、授業者が従事しない部分での「教師」としてのふるまいを引き受けて初めて「教師」となりえる余地が大きいことがわかった。いわば、TA とは、生徒 1 人 1 人の学習を深めるためのもう 1 人の「教師」であるというより、授業を円滑に進めるための授業者の支援者でもあるといえる。また、調査者の注意を生徒が受け入れない場合 (反抗と取れる応答を返す、調査者の示す行為に従事しない等)、TA として生徒と相互行為を行う基盤を失うことになり、「教師」であり続けることが困難となることがわかった。つまり、教師的な立場にある者が、授業中に逸脱的なふるまいをする生徒に対して注意をせずに見過ごせば「教師」として不適切な対応とみなされ、自らの立場を危うくすることになり、たとえ注意をしても生徒から抵抗を受けることで「教師」であり続けることが困難になるのである。

(2) 授業者の視点から—「注意」に見る教師—生徒の相互行為—

以上から、教師が授業を円滑に行うために用いる方法の一つとされる「注意」は、教師自らが教師であることが困難な状況に導くことさえあるといえる。

保育場面における保育者の子どもへの注意を分析した串田 (2003, p. 82) によれば、「注意された子供に求められているのは、それに言語的に応じることで、それに応じて焦点の定まった相互行為のチャンネルを開くことでなく、ただ行動の変化によって注意を理解したことを『表示 (display)』することだけである」という。中学校の授業場面における「注意」も、教師が示した生徒の行為記述 (例えば、「うるさい」という発話) に対し、生徒が反応し教師と会話を続けることが望まれているのではなく、行動の変化 (「話を止める」「静かにする」という応答が生徒には望まれている。すなわち、教師の「注意」が成功するためには、教師の発話の後に生徒が授業に適切な行動へと変化させることが必要なのである。しかし、授業内の教師 - 生徒間のやりとりにおいて、生徒が教師の「注意」に従うという保障はない。生徒が不適切な言語的な応答をする、もしくは、不適切な行動をとることが観察可能となることによって、教師の「注意」は失敗したと見なされることになる。(授業における「不適切」なふるまいは、どのように観察可能となるのかは、改めて検討をする必要がある。) このように授業場面における教師の「注意」の失敗は、授業中の相互行為場面において常に出現する可能性がある。その理由を、以下に挙げる。

①教師は、授業中に生徒に向かって話をする権利をもつ。それゆえ、常に生徒から不適切な言語や行動による応答を受ける、もしくは生徒から適切な応答が得られない可能性に晒されている。

②教師は、授業中の生徒からの問いかけに答えなければならないという義務を負う。教師がこの義務を放棄することによって、教師による一方的な会話の終了とみなされる可能性がある。

③教師と生徒の個人的なやりとりでありながら、教室という公的な空間で為される相互行為であるため、教室全体の関係性の中に対話が位置づけられている。そのため、他の生徒から新たな応答が教師に向けてなされる可能性がある。

研究成果の概要 つづき

一般的に教師が生徒を授業に参加させ続けるために用いる「注意」という相互行為は、教師が生徒を授業内の適切な行為に差し向けるための方法である一方、教師が「教師」であることを困難にもする。それは同時に、生徒が教師に向けて「個性」を表明する場にもなると考える。

2. 授業場面における生徒の「個性」の表出

1 では授業場面における生徒と教師の相互行為が「教師」という存在を脅かすものとなり得ることを示した。しかし、授業場面で生徒が教師の想定外の反応を示す場面は、「注意」に限らず日常的に生じるものである。授業内で無秩序を生み出す相互行為が生徒から立ち上がる時、教師は相互行為の修復を試み、その一方で、生徒は教師との相互行為を通して自らの「個性」をあらわにする。ここでは、1 で得た知見を元に、生徒が授業において自らの「個性」を主張する方法について予備的な考察を行う。

生徒の授業内での発言機会は、教師の裁量によって付与され、生徒の発言権は制限されているようにも思われる。しかし、生徒は時に、教師による発言権の付与を無視した発言をする、教師の参与しない生徒間の会話を継続させることで、自ら授業内での発言権を獲得する。このような状況において、生徒の発言のタイミングや順番、他の生徒の発言への応答の仕方から、生徒間の人間関係や「個性」が観察可能となる。つまり、「個性」や「性格」とは、ある瞬間に立ち上がり、次の瞬間には消えてしまうような相互行為の積み重ねとして表出するのであって、個人に内在し、変更不可能なものではないということだ。ギルバート・ライル (Ryle, G. 訳書, 2005) が指摘するように、私たちが「個性」や「性格」として理解しているのは、行為者が「そのようなことをする傾向性がある」ということを表すものにすぎないのである。しかし、一般的に「個性」や「性格」は生徒個人に内在すると考えられているため、授業内の生徒の発話や行為は、「生徒指導」の対象になるということを描き添付しておく。

生徒の「個性」が観察可能となる具体的な相互行為場面の分析は今後の課題である。本研究では、中学校の授業とは、教師が生徒に知識を伝達し、生徒と教師が共に学ぶ場としての側面よりも、教師-生徒間や生徒-生徒間の相互行為を通して、生徒の「個性」や「性格」を形成する実践の場であるという仮説を提示するに留める。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

とくになし